

化学におけるカオスと秩序に関する国際シンポジウム

二〇〇〇年三月十七日から二十九日まで、本学主催「日本化学会はかみ奈良県新公会堂で開催された「化学におけるカオスと秩序に関する国際シンポジウム」が奈良公園内に開催された。このシンポジウムの目的は、化学におけるカオスと秩序に関する基礎と応用について討論し、併せて最近の研究成果と市民生活との関連性を市民とともに考えるなどを目的とするものであった。ここ数十年様々な化学系におけるカオスと秩序に関する関心が著しく高まってきた。これは、非線形化学反応と呼ばれる反応の単純な化学モデルの研究が、生物界や自然界の複雑な現象、自発的リズム現象を理解する上で極めて重要な役割を果たしているためである。

カオスと秩序の制御と創成は、ミクロな化学反応が協同的なマクロな現象へと展開する時間発展の

過程に深く関わっており、化学物質の機能を高め、新しい機能の発現にもつながる。最近急速に発展している分子レベルの自己組織化という視点も設けて、この分野の研究者が一同に会し、化学におけるカオスと秩序の新たな分野の開拓を指向した。これと同時に、奈良教育大学の教官による、市民向けジョイントシンポジウム「科学と芸術の接点」を開催した。シンポジウムは次のようなプログラムで進行した。



生が設置と調整を深夜まで行い間もなく開会式は、大久保哲夫学長の開会挨拶で始まり、文部省学術国際化委員会に備えた（SCS写真）。

化学教授 松村竹子

賀詞、メディア教育開発センタ
ー所長坂元昂氏のSCSによる祝
辞、松村竹子組織委員長による歓
迎の辞が述べられた。開会式に引き
続き、四件の特別講演が行われ

十七日午後一時から能楽堂において開会式が開催された。本邦初のSpace Collaboration System)車載用LIDAR国際会議。

局学術課長補佐加藤幹彦氏の來賓祝辞、メディア教育開発センター所長坂元昂氏のSCSによる祝辞、松村竹子組織委員長による歓

本学元学長の藤永太一郎名誉教授も講演を聽講された。夕方から歓迎セッションが三井ガーデンホテルで行われた。

十八、十九日は分科会に分かれ研究者が各セッションごとに五、六名、それぞれ二十分から三十分の講演を行った。プログラムは招待講演者による招待講演、一般参加者によるポスター発表で構成された。シンポジウムの内容は次の四部門であった。

二 化学系におけるカオスと秩序

三 ライフサイエンスの中の方

四 オスと秩序

学際的分野における将来の展望

市民向けのジョイントシンポジウム「科学と芸術の接点」では、奈良教育大学福井一助教授による「音が音楽になるとき」、

同鷹田宗孝教授による「やきもの美」ところ」、

奈良県立医科大学大西武雄教授による「太陽・地球・生命」の講演がなされた。

それぞれの講演は一般参加者のために日本語で、海外からの参加者のために英語の同時通訳で行なわれ、シンポジウムに参加した外国研究者も熱心に聴講した。実演の部では宇宙科学振興財団の黒田隆二氏による墨流しの実演、小柴幸文氏による竹と

空飛ぶ薄板など市民と会議参加者が共に参加・交流できるイベントが用意され、会場は小さい子どもをつれた家族で賑い、三十名を超える参加があった。手作り絵本の会場では、ハドソン教授（米国）も飛び入り参加し、絵本を英語と日本語で読み合って掛け合い読みもあり、盛りあがつた。

また、大学生・高校生と海外の科学者達とのトークがあり、真剣に語り合っている姿が印象深かった。

会議には、ドイツ、アメリカ、シンマーカー、フランス、ベルギー、デンマーク、チエコ、オランダ、トルコ、ボーランド、ノルウェー、イギリス、ハンガリー、中国から



んほの製作、シャボン玉の実演（玉村公二彦助教授）、手作り絵本の展示（梶田幸恵教授）、コンピューターミシン（赤澤泰氏）、ペッタボトルによる振動引き込み現象、

本学が主催する初めての国際シンポジウムは、各方面のさまざまなお支援とご協力により、成功裏に終わり、世界の学術発展のため寄与することができた。また、

同時開催したジョイントシンポジウムによって、市民との活発な交流が行われ、学問上の発展の寄与と市民生活への還元という当初の目的を果たすことができた。

の研究者に加えて、日本に滞在する八名の外国人研究者が参加し、国際色豊かであった。